近世三遠南信地域の社会的紐帯

―遠江から見た南信濃・三河―

愛知県立大学日本文化学部教授
大　塚　英　二
（当日の報告をもとに執筆）

はじめに

本報告は、三遠南信地域という現代社会において一定の社会的共通性があると合意されている地域社会について、遠州地方からの視点で（しかもほぼ江戸時代に限定しながら）その内実を検証しようとするものである。

ここでは、以下の各節で議論することとなる素材の提示を行う。

第一には、地理的環境について考察することが求められる。中央構造線とフォッサマグナ（中央地溝帯）により囲まれたトライアングル、そして人びとの動きを規定する道路の自然発生的形成の問題について触れる必要があろう。

第二には、経済的環境の問題がある。塩の道（陸上）を始めとした流通と、舟運（水上）における木材の流通は当該地域では最もポピュラーな問題であり、三州―信州―遠州のつながりを最もよく示すものであろう。なお、経済的環境には地域的な技術の問題も大きくかかわってくると思われる。

第三には、行政的環境の問題がある。これは幕府代官支配地として中泉（遠州磐田）―赤坂（三州豊川）としてつながる遠江・三河の一体的関係を検討することである。さらには、南信地方の飯島代官所との関係にもかかわってくる。

第四には、宗教的環境の問題がある。これは秋葉道として塩の道とも重なるのであるが、秋葉信仰は非常に重要で、この火の神をめぐる三州―遠州―信州のつながり（もちろん秋葉山信仰はそれにとどまるものでなく中部地域全体にかかわる）は、より広域の地域的交流の中核的部分をなしていた。また、そうした民俗的なつながりよりも更に近世的イエ的な宗教関係としての寺院信仰を見てみると、曹洞禅普及の問題が大きい。これは遠州から三州への動きとしてつとに知られたものである。

第五には、民衆的地域秩序の環境の問題がある。遠州に本拠を置く浪人集団（武浪）の仕切や虚無僧集団の仕切の問題が民衆生活上の地域秩序の問題として存在するのである。普化宗浜松普大寺の東海道沿いの仕切りは宗教的要素も含むが、地域にとっては悪ねだりの問題として顕現しているのである。

第六には、文化的環境の問題がある。ここでは遠州国学の展開の仕方が重要である。信州（東濃）―三州―遠州とつながる豪農・神官のネットワークの問題として、さらには幕末維新期の政治状況の問題として重要であろう。

以下、上記で示した内容に沿って議論を進めていく。

1．巨大な断層と海岸線に囲まれた地域

遠州と三河・南信とのつながりを考察すべき視線は、まずその列島上のトライアングルの地理的環境に向けられねばならない。西三河と東三河の間には地理的にはむしろ大きな溝がある。そして、遠州でも西部と中東部では大きな違いがある。三遠信といっても、より深い関係性は南信部に頂点を取った細長い三角形の地域こそ、古い時代からのオリジナルな関係を持つ地域と言えるのではないか。

渥美半島及び豊橋・豊川周辺部から奥三河に入って伊那地域につながるところ、そして天竜川から南進して浜松東部につながる領域、これが生物学的・植生的なまとまりを有する地域であった可能性が高い。これが自然な道路・河川によって作られる関係性だと思われる。三河（新城、のちに岡崎から）から飯田へ、遠州（福田、のちに相良から）から飯田へというルート＝塩の道が生まれる。これは信州において岩塩生産がほとんどなかったことによる。

2．経済的環境

経済的環境としては、1節とのつながりで、まず塩の道の議論からはじめよう。遠州の太平洋岸＝駿河湾では古くから塩の生産が行われていたが、中でも相良地方（現在の牧之原市）は一大生産地として有名であった。海岸部からは塩や海産物を運び、その帰りに山間部からは木材や山の幸を運んで、人々とモノが動いたとされる。その際のいわゆる「秋葉街道」は秋葉山に通ずる参詣道であるが、同時に塩の道としても機能したものである。歴史的にはこの塩の道としてのほうが古かったことは言うまでもない。相良から秋葉を通って飯田・塩尻へいく道と、逆に塩尻・飯田から秋葉を通って相良を始めとする遠州各地域へ下る道がある。秋葉街道は三大塩の道の一つに数えられ、相良地区には「塩の道の起点の碑」が立っている。

塩の道に関しては、その生産地の問題があるが、遠州塩の道の起点となった相良地方のそれが最も有名であるが、それ以外に浜松地域に隣接する福田地域でも塩業が盛んだったことが分かる（『福田町史』第5章「福田の産業」より）。そこでは、塩専売（国産）をめぐって相論（浜松塩町との出入等）のあったことが示されているが、遠州地域と信州地域との塩をはじめとした海産物でつながる構造が見て取れよう。

一方、三河と信州の関係であるが、これも三河湾でとれた塩を岡崎から足助まで船で送り、そこからは馬の背に載せて信州まで運んだという。三州中馬稼ぎといわれるものだが、足助で付け直したりブレンドしたりしたので、「足助塩」の名も生まれた。三河から飯田までを飯田道と呼び、これも代表的な塩の道である。

さて、経済的関係の上では舟運、主には河川流通が重要である。遠州側の視点からは天竜川が重要である。『久能山誌』には「天竜川上流からは、久能山修復用の木材と榑木が河口の掛塚湊まで川下げされた。掛塚湊で廻船に積み込まれた建築用材は、その後清水湊まで運送された」とあり、「伊那・飯田から下瀬渡場・南渡場、天竜川の鹿島十分一番所を経て掛塚湊へ」つながる南信と遠州の強い関わりが示されている。ここには、モノを動かす力としての徳川将軍家ゆかりの駿河久能山の吸引力の大きさが知られる。なお、掛塚（現磐田市）からは必ずしも駿府や江戸など東方へのみ物資が動くわけではなく、同湊は東西各方面へ向かう廻船の拠点となった。背景に江戸や駿河府中の吸引力があることは大きな要素としてあるが、それを差し引いても、遠州と

三河・南信との、天竜川とその川湊を媒介した関係の深さは理解されるだろう。

天竜川を通じて運ばれるものは、信州側からは木材などの商品であったが、その戻り船は、例えば江戸方面へ向かった場合、その帰りには船の重し（重心をとるためのもの）ともなる伊豆石を積み込み、北遠まで運ぶことがあった。これまでは遠州までしか確認されていないが、伊豆石による建築の分布は南信まで遡上していた可能性がある。

3．技術的環境

２節の経済的環境に関わるものとしてそれぞれの地域における技術的な環境の問題があろう。それは農業技術や各種の職人の技術に関わるものである。その中で管見の限りで一つだけ水利土木技術をあげてみたい。

報告者はかつて「近世後期用水相論と圦樋技術の展開」（『日本史研究』303、のちに『日本近世地域研究序説』、清文堂出版、所収）において、遠州袋井地方の鍔形仕立圦樋技術がどのような形で成立したか検討した。簡単に言うと、当該技術はいわば中部急流域型のものと評価でき、直接的には信州諏訪藩における八ヶ岳西山麓の滝之湯堰開削事業にみる、天明５年「滝之湯堰普請方仕様書帳」に記された「つば作り枠柱打通し、はなせんニして相堅メ」る工法、及び「荒川之事格別ニ念入仕合石詰ニ」する工法、更には水門部分に枠を設置し沈め、その中に石を入れて固めることで鍔の役割を果たさせ、樋管の流出を抑えるものであったことが確認できた。つまり、川除に広く用いられた枠類を圦樋技術に応用したもので、信州諏訪藩田沢村名主坂本養川によって進められた技術との類似性が確認できるのであり、信濃の技術が遠州へ伝播したのではないか（あるいは両者の間で相互関係があった、いずれが先かは判断できないが）と、考えられるのである。この中部急流地域型の技術とは、三河・信濃・遠江に共通のものとして理解できよう。

この三国をはじめ東海甲信越地方は主要河川でのいわゆる国役普請が行われるところであったから、共通の技術体系を有した可能性がある。それぞれの地域固有の技術が交流して結びついたのか、幕府主導の技術として定着したのかは分からないが、共通のものがあったことはうかがわれるので、遠州側からの視点の一つとして掲げることは許されよう。

なお、三河と遠州の農業技術という点では、『百姓伝記』の成立地域という問題が出てくる。いまだに正確な成立地域は確定されていないが、東三河（吉田あたり）から中部遠州（横須賀）にかけての太平洋側沿岸地帯での成立という説が有力である。当該地域は農業経営上の共通点がかなり見られるゆえのことであり、その背景として自然的地理的条件も関わっている。列島上での大経営から小農経営への近世的転換の技術的様相を、この地方を舞台としてみることができるわけで、その意味でも三河･遠州のつながりの大きさが理解できるのではないか。一方で、用水･治水技術において遠州では信州由来の技術を導入しているとすれば、三者の技術的なつながりも想定される。

4．行政的環境

行政的環境からみると、遠州中泉代官所と三河とのつながりを考える必要がある。幕府の三河代官は一時期単独の代官として機能した時代もあったが、多くは中泉の出張陣屋的な位置づけがあり、ほぼ江戸時代を通じてその指示系統の中にあった。それゆえ、郡中惣代など幕領を要に組織された地域有力者の連合体も遠州と三州で一体となっている場合があった。例えば、三州赤坂の郡中惣代が死去してその後継を決める際などには中泉の郡中惣代が三州の惣代と一緒になって

幕府に嘆願をしている例がある（『愛知県史』近世東三河編99）。その時には遠州中泉代官への願書を出すのであり、そうした必然性が認められた。

また、中泉代官所に隣接した場所には1587年に家康によって建設された中泉御殿があった。徳川将軍家が東海道を往復する際の宿泊施設あるいは休憩地として建設されたものであるが、1670年に廃止されるまで機能した。家康が各地に作った御殿・茶屋の一つであるが、これと同様のものに尾張藩における御殿と所付代官所の関係がある。いずれにしろ、御殿が置かれたところは支配・行政の点で非常に重要であった事がうかがえる。その遠州の拠点こそ中泉であり、当該地は結果的に三州の幕府領を管轄することとなり、遠州と三州を直接つないだのである。中泉は、幕府の一般の代官所とは異なる郡代的な位置にあったと想定され（もちろん笠松のような郡代であったわけではない）、三河―浜松（城）＝西遠―掛川（城）＝中遠―東遠―駿州を結ぶ要地であったと推定される。

こうした遠州―三州の一体的関係の歴史は徳川氏の五か国領有時代に遡るが、より古くは駿州今川氏の侵攻・領有に起源を持つと考えられる。両者とも駿府が行政の中心であり、そこから西に延びる行政機構のラインの上で中泉と三河の関係を理解することができよう。今川氏は一時期三河全土を領国化し尾張南部まで掌中に収めた。そうした過去の支配・行政ラインを前提に見る必要があろう。なお、武田氏の駿河・遠江・三河侵攻もこの地域では重要な関係性を形作っているように思われる。武田氏は二つのルート、即ち東海ルートと南信からのルートで織田・徳川両軍に対し侵攻したとされるが、このまとまり（三・遠・南信）こそが、家康の五か国総検地（一円検地）などとあいまって行政支配の一体性へとつながっていったと考えられる。

三河・遠江・南信の共通点は10万石以上の大名が存在しない点である。浜松藩の7万石（水野忠邦が一時期）が最高で、ほぼ5万石以下の譜代小大名が東海道ルートとその上部に蟠踞し、軍事的要地を連携して守護する形であった。そうした譜代小藩と多数の旗本の扶養地ともなっていたのが三遠南信であり、その地域的結合に大きな影響をもたらしていたのは幕府代官の存在であった。

こうした三遠南信のつながりは以下のような戦国期以来のかかわりの中から継起しているように思われる。すなわち、西三河では松平氏が力を持つが、東三河には有力大名がない状態であり、遠州にも有力大名は存在せず、南信も（信州は山にさえぎられて盆地ごとに地域権力が存在していた）そうした有力大名がいない。この地域は、有力大名がないところに、他国ないし他の地域から侵入者があって支配される、そうした共通性があったのではないか。東からは今川・武田、西からは松平（徳川）・織田、そうした弱小国人領主たちが叢生しているところを、まさに草刈場的に他国から侵攻して統合するような地域的特徴があったように思う。

以上のような地域的特徴を歴史的前提として、行政的には、遠州中泉―三州赤坂の代官ルート、さらには飯島陣屋の南信での影響力（飯田藩5万石から3万石を分けて幕府直轄地を構成）を考慮する必要がある。特に、飯島代官所を出張陣屋として兼務することもあった遠州中泉代官所の位置づけの大きさを考慮したい。この遠州中泉からの行政的なベクトルを重視し、その淵源を家康の五か国惣検地による行政・支配に基づくという仮説を提示したい。

5．宗教的環境

ここでは、地域を考える場合に重要な寺院宗派のいわゆる教線の問題を扱う。遠州には、自明であるが曹洞宗寺院が多い。鈴木泰山氏の研究『曹洞宗の地域的展開』によると、曹洞宗は中部

遠州から東部遠州に教線を伸ばし、もともと力のあった真言宗を圧倒したという。『豊岡村史』通史編第３章第２節「曹洞宗の発展と一雲斎」では、遠州を中心とする東海地方に展開した曹洞宗教団の大きく発展する様子が描かれている。また、鈴木泰山「中遠州における仏教文化の展開」(『袋井市史』通史編）によると、太源派と寒巌派が並び立ち、寒巌派の華蔵が普済寺（浜松市）を開き、その弟子たちが遠州から三州にかけて広く教線を拡大したという。その影響力は三河東部や奥三河へも及び、当該地域での曹洞宗檀家の多さにかかわっている。ここまでは検証済であり、以降は十分な検証を経ていないが、そうした曹洞宗の影響は南信濃にも通じていないだろうか。遠州からのベクトルとして三河にも南信にも曹洞禅の影響が伸びていたように思う。

東海地方における曹洞宗の発展は、「大洞院（森町）の実際の開山にあたる如仲天闇の教化によるところが大きい。のちに大洞院の門末寺院は3000か寺を越え、東海地方の曹洞寺院の70㌫を占めるという発展を遂げた」のである。如仲天闇は信州上田の出身であり、俗称は海野氏である。９歳で伊那谷恵明法師に法華経や臨済宗も学びその門にはいるが、その後越前（現福井県）曹洞宗龍澤寺の開山梅山の許に入り梅山門下を代表する立場となった。龍澤寺末は広く尾張・三河・遠江に及んだとされる。その具体的つながりとしては「遠州とのかかわりとしては…飯田（森町…筆者注）の在地領主山内氏の招きにより来たり、崇信寺（現森町）を開いた…橘谷に大洞院を開創し、本師梅山を開山に推し、自らは二世となって、東海地方一円にわたる曹洞宗発展の基礎を築いた」（以上、前掲『袋井市史』）とされる。この如仲天闇を通じて信濃―三河―遠江のトライアングルの関係があったものと思われる。

ところで、この曹洞宗の展開は可睡斎の創建にかかわって次のように述べられている（『豊岡村史』268頁から)。「遠州における曹洞宗の発展は、大洞院を開いた如仲天闇に始まり、ついで一雲斎を開いた川僧慧済の活躍によるところが大きかった。ところが、その後曹洞宗寺院のかなめになったのは、大洞院や一雲斎ではなく、可睡斎であった。…可睡斎は一雲斎の末寺ということになるが、それにもかかわらず、その後可睡斎が真巌派の本拠とされたのは、徳川家康の命によるものであった」というのである。家康が1583年に仙麟等膳に対して与えた文書(『静岡県史料』第４輯、可睡斎文書）には、可睡斎が三河・遠江・駿河ならびに伊豆国の４か国の僧録となった以上は、当該国の曹洞寺院をすべて支配すべきとある。ここにおいて、可睡斎は４か国の曹洞宗寺院の総元締めになったのである。伊豆は家康の領国とは異なるが、ほぼ家康の領国としてのまとまりの中で可睡斎の支配が認められたのである。

さらに、可睡斎による三河曹洞宗寺院支配という点では、『愛知県史』維新編451の史料「慶応四年四月　遠江国可睡斎より宝飯郡八幡村西明寺宛掟書写」が興味深い。そこでは、東海大僧録として三河・遠江・駿河・伊豆の四か国曹洞宗寺院を支配した可睡斎が、戊辰戦争中に自らの組織と内部の紐帯をより強固にするため末寺に対して掟を守らせようとしていたことが窺われるのである。

以上のように、曹洞宗を媒介とした遠州と三河のつながりの深さが分る。とりわけ東三河に多い曹洞宗寺院とのつながりは顕著であり、信州もまた如仲天闇の出身地としてつながっているといえるのである。

６．民衆的地域秩序の環境

ここでは宗教的な装いを取りながらも実際は悪ねだりをする虚無僧集団や、その身分が実際の牢人かは定かでないものの、浪人として足代などをねだり集る集団である「武州浪人」の問題に

ついて考える。

実は、尺八を演奏する虚無僧集団＝普化宗の東海道の拠点が遠州浜松に存在した。しかし、普化宗は明治維新政府から本来の宗教とは認められず（幕府とのつながりが深いことを理由とされた）禁止され、宗門としては解体された。浜松市成子町法林寺にはその普化宗普大寺跡の墓石が移されて現存している。そして、普大寺の跡地はヤマハが受け継ぎ、そこで楽器生産を始めたのは因縁めいたものを感じさせ、興味深い。

さて、普大寺関係の虚無僧は自らの活動地域を仕切り場と称して、そこに入って来て悪ねだり（尺八の演奏をして対価としての金品を要求）をする者たちを寄せ付けないようにするという約束の証文を村々との間で結んだ。もちろん、そこで発生するのが仕切り料であり、悪い虚無僧から村を守ってやるという一種のミカジメ料をせしめるのである。この地域仕切り状は三河部にかなり浸透していた（『新修豊田市史』近世Ｉの420史料）。

天保15年（1844）には、美濃芥見（現岐阜市）において甲州乙黒村明暗寺虚無僧と仕切り場をめぐって大きな争いを起こしているから、美濃国にも入り込んでいたことが分る。なお、東海地域では伊勢鈴鹿の普化宗門（普済寺）も入り込んでいる。こうした状況から、これも十分な裏づけが取れていないが、南信地域にも奥三河を通って普大寺らの普化宗虚無僧が入り込んでいたと推定される。

『愛知県史』東三河編にも普大寺の資料がある（『県史』維新編699頁、454史料「明治３年11月普化宗門取締りにつき遠江国普大寺役僧より証文」）。この史料によれば、仕切り状は印刷物で年月日等を書き込む式のものである。それだけ一般化して多数に発給していたものであろう。ほとんど御札のようなものになっていたのではないか。翌明治４年（1871）に普化宗は廃止されるが、その直前まで豊橋地域に入り込んでいたのである。文書は日色野区有文書であるから、普化宗虚無僧への対応は村ないし庄屋の仕事として行われていたことがわかる。

また、『愛知県史』西三河編（763頁399の史料）でも天保７年（1836）に普大寺が虚無僧を偽称する浪人を手配する廻状が示されている。そこには岡崎宿に普大寺の出張所があり「一幸」なる人物が常駐していたことがうかがわれる。

以上から、遠州浜松より三州吉田、更には岡崎に至るまでの地域において、虚無僧の仕切りとして民衆的地域秩序レベルでの食い込みがあったことが確認できるのである。

次に、村社会が拒絶する（郡中議定などの項目に入っていることが多い）悪ねだり行為として浪人の仕切りがある。報告者はかつて金谷町史を編纂する中で、武州浪人の惣代が袋井宿に居住し、そこから周辺村々の有力百姓のところに日常的な接触を行っていた事実を知った。惣代を交代する時には庄屋のところに挨拶にきていたことが庄屋の日記に記されていたのである。今その史料を直接かかげることはできないが、『豊田市史』近世Ｉの423の史料から、「武浪惣代」すなわち武州浪人の惣代である早川八兵衛と遠州袋井宿の三浦時之輔が文久元年（1861）３月に奥三河夏焼村（南信境）から賄料を受け取っていることが確認できる。

ほかにも、奥三河部では（『豊田市史』Ｉの419の史料による）武浪惣代ら３名が文政２年（1819）２月に川手村（南信境）から仕切料として青銅20疋（銭200文）を得ていたことが分かる。これは一年間の仕切料であり、村方にとって決して小さな負担ではなかったろう。よって、近世後期にはこうした浪人らの悪ねだりを排除する動きが起こってくるのである。しかしながら、一方では、面倒な対決をする道を選択せず、外部から侵入してくる勢力には、金銭を渡して事なきを得ようとする動きも存在したのである。

武州浪人とは、もちろん真正の幕府や武蔵国内の藩で浪人した者たちの集団ではない。主に東海道沿いで各宿場を根城にそのように呼称して集団化し、集り行為をしていた者たちである。惣代を名乗る者はそれぞれの時代に多くあるが、そのすべてを統率する者が袋井にいたとは考えられない。ただし、明確にその居住地を示すのは管見の限り袋井のみであり、遠州中部に位置する比較的小さな宿場である袋井に当該集団のまとめ役的な者が居住していたことは間違いないだろう。その武州浪人惣代は、東は相州、西は尾州までを縄張りにしていたように思われる。特に駿河から三河までの仕切りは非常に強力であったと推定される。巨大都市では取り締まりが厳しいので、中間地帯ある遠江を本拠として民衆的地域秩序を構成していたと推定される。

さて、上述のごとく、奥三河（三河東部）の南信境界部まで武州浪人が入り込んでいたことから、史料的な確認はまだできていないが、南信地域に「武浪」が仕切りを拡大していたことは容易に推定される。遠州からの武州浪人仕切りの秩序のベクトルとして、三遠南信地域が構成されていたことはほぼ間違いなかろう。それは秋葉道のルートを背景として持っていたとみてよいだろう。なお、三河辺りでは武州浪人とは別に「名古屋浪人」と呼称される浪人集団が見られる。尾州瀬戸地方でも「武浪」と「名古屋浪人」の仕切が両方みられた。それぞれ本当に浪人であるかどうかはわからない。おそらく無頼の者たちの自称であった可能性が高いが、もともと牢人たちがそうした「…州牢人」という形で名乗りする場合が多かったことは事実であり、そうしたところから始まった名乗りと活動であったのだろう。似非浪人集団も多かったと推定されるが、地域の村役人たちとは顔なじみでもあり、そうした無頼の徒を地域有力者や「行政」が利用することがあったのではないか。

7．文化的環境

火の神にかかわる秋葉山信仰もまた文化的環境の一つであるが、そうした民俗的レベルのものではなく、学術的なつながりという点で見ると、国学のつながりが重要であろう。「夜明け前」で有名な南木曽地方の国学者と東濃地方の国学者（中津川の間家など）の交流は日常的なものであったが、東三河（奥三河）の国学者＝豪農（例えば稲橋村の古橋家…同家自体が中津川の出身である）とのつながりも大きい。

古橋暉皃は江戸へ出て平田鋭胤に学んだが、その国学の流れの上では、荷田春満から賀茂真淵、平田篤胤へという流れがある。ここで注目すべきは、賀茂真淵は三河浜松の出身であり、春満と真淵の間を繋ぐ人物として遠州国学の祖とされる浜松諏訪神社神主杉浦国頭がいるのである。この遠州国学は三河国学へ影響を与え、吉田豊橋の羽田野敬雄らがその系譜につながる。この羽田野は古橋氏ともつながり、東濃・南信とつながっている。結果として、古橋を間にはさみ、三遠南信の国学者はつながりを持つこととなった。

小山正の『内山真竜の研究』では「真淵の遠州の門人で、次代の遠州国学を担ったのが、内山真竜であった」「真竜の国学史上の功績はその研究著述のほか、遠江・三河・駿河・信濃等、一三六人に及ぶ門人を教育し、（数多くの…筆者注）俊秀を本居宣長に入門させ、門人たちと種々の霊祭（宣長十七年祭がその代表的な例…筆者注）を挙行するなどして遠州地方の国学を郷村内部にまで発展させ、遠州国学の基礎を築いたことである」とされる。三遠南信だけでなく駿河も含めた、非常に大きなネットワークの中心に遠州国学があったことが分かる。

こうしたネットワークを背景として、幕末維新期の政治的な動きができてくる。先の羽田野を中心に作られた三河国の草莽隊、遠州国学者を中心に作られた遠江の草莽隊、そして南信の草莽

隊は、戊辰戦争の東征軍において非常に大きな位置を占めていたのである。

おわりに

以上、遠州から見た三遠南信の社会的紐帯上で論点となるべきものを列挙した。もとより本報告は個別の研究報告ではなく、荒っぽく視点を提示したに過ぎない。そもそも遠州は地域的に単独で理解されることもあれば、今回のように三遠南信のまとまりでとらえられる場合もある。また、三遠の括りで、あるいは駿遠の括りで、さらには遠州内部が西遠・中遠・東遠などと切り分けて扱われる場合もある。それぞれの局面においてどのような地域のまとまりを意識しているかで、これらの括りかた・切り分け方が出てくるのであるが、とりあえず今回はより広域的な地域的紐帯のありかたを見ることで、現代における三遠南信地方という括りの歴史的な内実の検証を図ることになったと思う。その意味で、本報告が課題の一端を担えているのであれば幸いである。本報告での論旨は明快であると思われるので、以下ではほかに留意すべき事柄に触れてまとめに代えたい。三点ある。

第一に、ここで触れた論点は実証的にはまだ展開が全く不十分であり、それぞれをさらに多くの事実ないし史料によって深めていく必要があるということである。いうまでもなく、三遠南信という括りを意識した研究は皆無であり、三遠というつながりを意識した研究もあまりない。むしろ、かつて地方史研究協議会で行われた議論では、静岡県や愛知県ないし三河地方を、地域として単一でまとまりのあるものと捉え、非常にあいまいな表現ながら、交通や流通の観点から、東西をつなぐ媒介的な存在として位置づけてきたにすぎない。そうした見方では、つながる中身が希薄になってしまい、地域論としては実のないものとなりかねない。そうしたことをなくすため、研究方法として、ベクトルは一方からであったとしても、双方向からの史料を見据えた議論が必要となるはずである。一つの地域の史料から見たケーススタディでは不足する事態の多くあることを意識した史料収集が求められよう。

第二に、三遠南信という括りを歴史的にどのように理解するかという問題があろう。つまり、あいまいな通時的にいつでも括れる内容から見ていくのか、歴史段階的に形成史的な形で見ていくのか、現状からの遡及的な方法で社会科学的に見ていくのかという方法上の問題である。今回はすべてが近世（一部近代）という歴史時代で並んで報告が立てられたが、段階的に区切り目をつけたような報告もあってしかるべきである。本報告では歴史段階的展開はほとんど考究できなかったので、今回提出した論点をまさに歴史的段階的に追究する姿勢が求められよう。

第三に、そもそも三遠南信という括りは方言や食物、芸能をはじめとした民俗的文化的側面での共通性という認識が根底にあってのことと思われるので、歴史学に隣接する諸学問分野からの応援・協力が重要であることは論を待たない。今後は、広く人文社会学の学問領域に幅を広げた議論を行う必要があるだろう。歴史学もそうしたところからの刺激を受けて新たな史資料の発掘ということにもつながるのであろう。

以上、最後に思いつくままに今後の課題にかかわるような事柄に触れた。雑駁な報告となってしまったが、ご海容を請う。